

説 教

神さまは未完了

＜出エジプト記3:14＞

金 聖 泰 牧師（オーストラリア留学中）



モーセの召命が描かれている出エジプト記3章は旧約聖書の中で最もよく読まれる箇所のひとつだと思います。3章が特に読まれるもうひとつの理由は、14節に神さまの名前が記されていることでしょう。召命に消極的な態度を示し、さらに「イスラエルの民に答えられるように名前を教えてください」と求めるモーセに対して神さまは14節で答えます。

神さまの名前として記されているヘブライ語 אֶלֹהִים אֲשֶׁר אֲנִי (エヒエ・アシェル・エヒエ) は意味の幅が広く、様々な訳が可能です。代表的な日本語訳には、「わたしはある、わたしはあるという者だ」（新共同訳）、「わたしは有って有る者」（口語訳）、「我は有て在る者なり」（文語訳）などがあります。この部分の英訳のひとつとして知られている「I am who I am」は、これらの日本語訳と同じ流れにあると言えるでしょう。この流れの訳によって映し出される神さまは、被造物とは全く異なり「自ら存在する創造主」としての姿だと思えます。

しかし、14節で2度も使われているヘブライ語「エヒエ」が、動詞 אִי (ハーヤー) の未完了形であることをより注目するならば、上記の訳とはややニュアンスの異なる訳も可能です。動詞の未完了形は、文脈や状況に応じて過去・現在・未来の意味を持ち得ることを示します。「I am who I am」という訳には「現在」に強調が置かれていますが、原文の未完了形が持つ意味の幅を生かすならば、「I will be what I will be」と訳することも可能です。これは決して新しいものではなく、中世のラビたちによってすでになされた訳のひとつです。この訳からは私たちは何を見出すことができるでしょうか。神さまは3章でイスラエルをエジプトから導き出す者としてモーセを召します。しかし、モーセは自分を召し出した神さまがどのような存在なのかを知りません。だからこそモーセは神さまの名前を求めたのだと思います。そんなモーセに神さまは「I will be what I will be」という言葉で自らを示されます。神さまがどのような存在であったのか（過去）、あるのか（現在）、あり続けるのか（未来）を知らないモーセとイスラエルに対して、「これから示すわたしの姿（what I will be）」を見れば知ることができると神さまは言われるのです。つまり、神さまはモーセとイスラエルの民にこれから起

こる「救済」を通して自らを顕そうとしているということです。

ここでひとつの問いが生じます。14節の「エヒエ・アシェル・エヒエ」は果たして神さまの名前なのか、という問いです。「I will be what I will be」という語の並びは一般的な「名前」の形とは異なっているように思えます。「名前」よりはむしろ神さまが自らを示される「方法」としてこの語の並びを理解することはできないでしょうか。十戒の「あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない」という戒めからも分かるように、イスラエルの人々にとって神さまの名前を呼ぶことは畏れるべきことであり、実際に神さまを表す4つの文字「YHWH」には発音できないように母音が付けられていません。イスラエルを含めた古代オリエン特世界において「名を呼ぶ・付ける」という行為にはその対象を自分の制御下（理解の下）に置くという意味合いがありました。もしかするとモーセは名前を問うことで、自分の理解の範囲の中に神さまを収めようとしたのかも知れません。しかし、モーセを招く神さまは「名前」の中に収まる存在ではありません。「エヒエ・アシェル・エヒエ」は、絶えず歴史の中で成そうとすることを成す「主権を持つ存在」としての神さまを示しています。

在日大韓基督教会の信仰告白の前文にはこうあります。「歴史の中で救いを起こされる神は、かつてイスラエルの民をエジプトの奴隷生活から救い出し、約束の地に導き入れられたように…私たちを…新しい神の民としてこの地に遣わし住まわせてくださいました」この前文は、私たちが日本に住んでいるという現実が「I will be what I will be」と言われた神さまの「未完了」の働きの内にあるという信仰を告白しています。韓日関係の緊張がかつてないほど増していく中で、在日コリアンを感じる息苦しさは時に絶望さえ与えます。しかし、「私たちの信仰」はこの苦境に立ち向かっていくことを促しています。なぜなら、私たちはモーセのように、神さまの主権によって召し出され、「この地」に立たされているからです。「I will be what I will be」と言われる神さまが私たちの現実において絶えず自らを示されることを信頼し、告白し続ける私たちであるよう願います。

韓日対照聖書販売



各ページ左に韓国語(改革改版)、右に日本語(新共同訳)が掲載されています。

●A5版変型・1772ページ

●価格: 3,000円(消費税・送料込み)

※お求めは総会事務所へ

韓日対照讃頌歌販売



韓国の新讃頌歌版です。交読文も韓日対照で掲載されています。

●B6版変型・1483ページ

●価格: 2,500円(消費税・送料込み)

※お求めは総会事務所へ

第4回常任委員会開く

第55回定期総会への献議案など審議

第54回総会期第4回常任委員会が、2019年9月17日、名古屋教会で開催され、常任委員21名の全員が出席して各種報告や案件審議、第55回定期総会への献議案が審議された。

定期総会へ上程される主な献議案は以下のとおり。

- ・神学考試委員会が上程した細則第8条追加項目「宣教協約を結んでいる教団から宣教師が夫婦で派遣され、宣教師考試基準（第8条）に満たされたと判断された場合、宣教師加入考試を受けることができる」の件。
- ・定期総会の総代に関する総会規則第3章第3条第1項の変更「総代は、地方会が洗礼を受けた教会員25名あたり視務牧師または視務長老を選出し派遣した総代である。残りの教人15名以上の場合は1名ずつ増員する事ができる。但し、宣教負担金を完納した教会の総代にのみ総代権がある。」の件。
(各地方会において視務牧師・視務長老の人数が著しく不均衡であることを考慮して多くの牧師、長老が総代として参席させるため)
- ・宣教委員会が上程した「第9回祖国の平和統一と宣教に関する基督者会議」開催に伴う特別委員会として「準備委員会」を設置する件。
- ・年金委員会が上程した年金規則の廃止と廃止後の資金分割と資金分割の内、救済基金設立に伴う救済基金委員会を設置する件。
- ・その他、予算案、各機関の理事、監査の推薦案などが上程されることになった。

青年会全協

定期全国協議会 開催

新代表に李智熙を選出

去る9月15日（主）17時から16日（月・祝）にかけ、青年会全国協議会（以下、全協）の第57回定期全国協議会（以下、総会）が横浜教会で開催された。オブザーバー・代議員を含め、総勢14人の青年が参加した。

1日目の開会礼拝には、信徒委員長の金迅野牧師から「深く憐れまれた」(マタイ9:35～37)という題目の説教を頂いた。私たちクリスチャンが怒りや悲しみを覚えたとき、イエス様に倣ってどのように行動すべきか考えさせられる時間であった。開会礼拝後は横浜教会女性会の方が美味しい夕食を用意くださり、食卓を囲んで交わりをした後、総会へと移った。2018年度の活動内容・総括を各部・各地方・各担当から受け1日目を終えた。

2日目には討議事項の検討と、新役員選挙が行われた。2019年度は代表：李智熙、副代表：中野晃徳、総務：嚴智用、書記：乾春紀を筆頭に、その他5人の青年を各部に迎えることとなった。

全9人の内、約半分である4名が新しく役員を始める青年として神様が導いてくださったことに感謝したい。

締めくくりとして、高誠牧師任をお招きし、閉会礼拝の時間を持った。「イエス様の語られる愛（マタイ5:



43～48)」という題で説教を頂き、ほかの青年団体と違って私たちが神様の子どもとして集まっている意味や、そんな私たちが求められていることを聖書から学ぶ時間であった。

新しくスタートする1年間を「こんなに足りない私たちでも神様が用いてくださる」と信じながら、神様に喜ばれる活動となることを心から願い、報告とさせていただきます。(報告：李智熙)

関西女性会

みことばと讃美のフェスティバル

関西14教会が参加して讃美競う

2019年9月8日（主日）の午後、関西地方教会女性連合会主催の第29回「みことばと讃美のフェスティバル」が大阪教会で開催された。

第I部の開会礼拝は、関西地方会会長林明基牧師（京都教会）により「主を讃美せよ」という題で説教がなされ、第II部は「みことばと讃美のフェスティバル」が進行された。

関西地方教会14チームの女性会はみことばと讃美で神様に栄光を捧げた。

審査の間に日本キリスト教会「ニッキ・キンキ・コール聖歌隊」と「関西地方会青年連合会」の特別出演があった。審査委員長尹聖澤長老の総評発表後、それぞれの賞を発表して賞状と賞品の授与が行われ、フェスティバル賞は京都教会が獲得した。

(報告：白野聖香)



関東女性会

讃美とみ言葉の夕べを開催

関東10教会が参加して讃美競う

2019年9月22日（主）関東地方教会女性連合会主催で「讃美とみ言葉の夕べ」が東京希望キリスト教会で開催された。

第1部開会礼拝は東京希望キリスト教会の具滋佑牧師により「新しい時代に仕える女性」(ローマ12:1～2)という題で説教がなされた。

第2部は10教会の220名以上の信徒が、讃美をもって神様に感謝と栄光を捧げた。審査をする間に横浜教会の聖舞チームが「十字架の伝達者」を披露した。

今回は横浜教会が優勝、川崎教会が準優勝、そして横須賀教会が人気賞を受賞した。残りの7教会は努力賞となり、努力賞の商品である韓国の辛ラーメン（2箱）授与された。

(報告：李銀珠)



青年会主協

第70回夏季修養会開催

夏季修養会70年の歩みを顧みる

2019年8月12日(月)～14日(水)にかけて青年会全国協議会主催による「第70回夏の修養会」が、愛知県新城市の愛知県民の森で開催された。今年は48人の青年が参加し、その内11人は韓国からの宣教チームであった。

開会礼拝では、李明忠牧師任より、参加者一人ひとりがここに集められたことに感謝し、これから起こる奇跡を願い修養会をスタートすることができた。

1日目の夕食は、豊橋教会からの奉仕によりブルコギ、キムチが提供され、さらに牧師任方が作って下さったカレーをいただいた。自然に囲まれて食べるブルコギとカレーライスはいつも以上に美味しく感じられた。

代表からの発題では、キャンプファイヤーの燃え上がる炎の中、全てを神様の計画と受け入れることの難しさ、しかしそこから生まれる深い恵みと導きを感じることができた。

2日目は聖書ワークショップを行った。中央委員による証しによって聖書を読む大切さ、そして常に神様を求める姿勢を学んだ後、参加者みんなで聖書に書かれている「神様の掟」を探す時間を持った。さらには、挙げた掟の中から自分が実践していきたい掟を参加者一人ひとりが発表した。その後、イエス様が行われた「足洗い」について考え、実践するプログラムを行った。金迅野牧師任から、イエス様はどのような思いで、弟子たちに何を伝えるために行ったのか、そしてそこから私たちは何を学ぶことができるのかを知った。金迅野牧師任のデモンストレーションを見た後、参加者はペアになりお互いの足を洗い合った。イエス様の深い愛、そしてその愛を示す姿勢を自ら行っ下さったことを感謝し、祈りを持って終えることができた。

2日目の最後のプログラムは、韓国からの宣教チームによるお祈り会であった。讃美奉仕(BLM)の素晴らしい演奏の中で讃美をし、今まで考えようとしていなかった自分の本当の思いや気持ちが少しずつ溢れていった。洪禎杓牧師任のメッセージの中で、「初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。(創世記1:1～2)」という御言葉は、まるで青年の心のように言っていた。青年ならではの悩み、葛藤、不安でいっぱいな気持ちに向き合い、全て神様に知ってもらい助けを求める祈りを捧げた。涙を流しながら互いの手を取り、青年一人ひとりのことを思いつつ、讃美し祈り合う恵みに満ち溢れた時間となった。

3日目は夏の修養会70周年記念プログラムを行った。在日大韓基督教会の歴史に思いを向けながら、これからの未来について、「こんな教会がいいな」という題目で話し合いの時間を持った。またこの意見を元に、今の自分に何ができるかを話し合い、未来の自分に向けた手紙を書いた。

閉会礼拝では新井由貴牧師任からのメッセージがあった。今回のテーマである「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣く」とは、身体は遠く離れていても互いにイエス様を信じる事で心が繋が



り、思いを分かち合えることを知った。韓国、日本だけでなく世界中で活躍する青年たちと共に2泊3日を過ごせた奇跡を感謝しつつ、主イエスキリストにあって1つであることを信じて共に喜び、泣くことができる青年一人ひとりとできるよう祈る。

岐阜教会

鄭仁仙長老将立式挙行

武藤まゆみ名誉執事推戴式も同時に

2019年7月28日(主日)、岐阜教会において鄭仁仙長老将立、武藤まゆみ名誉執事推戴式が行われた。堂会長の高誠牧師の司会で礼拝が始まり、鄭守煥牧師が「神の羊の群れを牧しなさい」(Iペテロ5:1～4)という題で説教した後、中部地方会長鄭守煥牧師の司式で長老将立式が行われ、また高誠牧師の司式で武藤まゆみ名誉執事の推戴式も行った。



将立された鄭仁仙長老は、1952年韓国ソウルで生まれ、1988年に渡日し、1992年に岐阜教会の執事に、2013年に勸士に就任し、岐阜教会と中部地方会女性連合会に奉仕された。家族は夫である臼井哲雄執事と3男1女がある。

(報告：高誠牧師)

名古屋教会

朴憲燮名誉長老が召天

総会副総会長を歴任、教会発展に寄与



名古屋教会の朴憲燮名誉長老が、8月19日老齢のため召天された。(享年100歳)

故・朴憲燮名誉長老は1919年に韓国で生まれ、渡日したのち1943年受洗、1961年に長老として将立されてから名古屋教会や中部地方会、また第38回期(1985年～1987年)の副総会長として仕えられた。

京都教会

尹載旺名誉長老が召天

半世紀にわたり長老として教会に奉仕



去る9月24日(火)京都教会の尹載旺名誉長老が、入院先の病院で召天された(享年92歳)。

故・尹載旺名誉長老は1927年韓国で生まれ、渡日したのち京都教会に入教、1955年に受洗され、1962年に長老として将立された。1998年5月に名誉長老として推戴され、今日まで教会と総会のため尽力され、信仰の模範を示した。

豊かな味、豊かな心。



代表取締役 吳永錫 (東京希望キリスト教会 長老)

四谷本店：東京都新宿区四谷3-10-25 Tel. 03-3354-0100

訪問
手記

朝鮮キリスト教連盟訪問記 <1>

大阪教会 鄭 然 元 牧師

これは、在日大韓基督教会（以下、総会）代表団が2019年7月26日から8月2日まで朝鮮民主主義人民共和国（以下、共和国）朝鮮キリスト教連盟（以下、朝キ連）訪問に参加した鄭然元牧師(宣教委員長)の個人的な所感を整理したものです。

1. 訪問目的

この度、代表団訪問は我々の総会が1981年から分断状況にある祖国平和統一のため、キリスト者として継続的な祈りとその間の苦しい状況の中において、1990年から2002年まで8次に及んで実施してきた「祖国平和統一のための基督者会議（東京）」の意味を再確認し、世界教会と歩みを共にしながら開催される事を「朝基連」と協議する事と、日本キリスト教協議会の代表団が（総幹事の金性済牧師外3名）過去の歴史に対する謝罪文を「朝基連」に伝えるためである。

2. 訪問前準備

日帝36年の抑圧の中から解放を迎えた私たちが、民族の分断の傷を負い、すでに70年を超える歳月を過ごしている。また、色々な事情により帰国できずに日本の地に住んでいる在日同胞は見えない休戦線を引き、この地においても隣人として生きている。一般的に大韓民国の旅券で「共和国」を訪問する苦しい状況にある在日同胞の中で「共和国」国籍を持った同胞は日本再入国のための日本政府が発行する「再入国許可証」を得なければならなかった。

法務省出入国管理所で申請をすると担当者との面談があり、まず日本から北朝鮮の渡航自粛に関する書類が出され、読むようにと指示された。その内容は北朝鮮訪問の自粛要請、細かくは在日北朝鮮当局の職員、またはこれを補佐する立場にある人と対北朝鮮、貿易金融に関する違法行為での刑罰に確定された時や、在日外国人が核、ミサイル関連の業務をした場合は再入国を認めないという説明と、これらの活動に関与したかあるいはしなかった場合再入国をしないと誓約をするように要求されるもの。国籍が大韓民国であることを確認され「再入国許可証」が発行された。同時に韓国政府においても北訪問申告書を提出し受理された確認書を持って、共和国の訪問準備が本格的に始まり、中国、北京を経由して平壤に入国する日程が確定した。

3. 平壤に

7月26日（金）、北京発中国航空に乗るため空港に到着した総会長、女性会会長と3名を日本税関職員が待っていた。その後狭い部屋に連れられた私たち一行は、北朝鮮訪問の目的と旅行所持品など精密な検査が始まった。特に10万円以上所持して出国する旅行者にはとてもきつくチェックした。今まで日本での生活の中で初めて体験する不快な感情であった。関西空港を離陸した飛行機は韓国上空を飛んでいた。飛行機の経路を画面で見ながら大田と水原の間を通過し、北方向には平壤を指していた。方向を変えれば30で行ける距離を私たちはなぜ中国を経由しながら行かざるを得ないかという現実が悲しかった。

北京空港に到着した一行は東京から出発した代表団と合流をする事になっていた。しかし、北京入国時にも問題が生じた。日本法務省が発行した許可証には中国ビザ、共和国ビザ（別紙）があるにも関わらず、なぜ韓国の旅券は使わないのかという質問に多くの時間を費やさざるを得なかった。

北京で一晩を過ごし、北京空港から平壤行きの飛行機に乗らなければならない。代表団が乗る飛行機は高麗航空（JS152便/北京出発13：05－平壤到着16：05）で、胴体に高麗航空とハングルで書かれた白色の飛行機が横たわっていた。

乗務員による安全に関する説明があり、しばらく後飛行中の食事が提供された。ハンバーガーと飲み物であった。二つ食べた人もいる。実質的に飛行時間は2時間であった。飛行機の中は暑く扇子で扇ぐ状態であった。

平壤に近づくにつれ空窓から見おろす風景は、都市が川に沿って成り立ち、遠くに見える山に囲まれていた典型的な韓半島の都市形成の姿であった。大同江の幹が鮮明になる中で飛行機は平壤空港に着陸した。

入国場にて共和国管理者に、入国の目的を聞かれる。朝鮮基督教連盟訪問と答えた。日本法務省が作成した許可証に入国許可の判子を押され、共和国で良い時間を過ごすようにと言われた。税関調査をする過程で驚くべき体験をした。共和国の訪問の案内書などには、携帯スマホが差し押さえられ出国時には返してもらえんというものであったが、保管された写真を見せるようにと要求され携帯を開け職員に渡した。しかし、しばらく調べた後に返却された。そしてカメラもやはり簡単な検査を終えすべての荷物と共に返された。

私たちを待っていた案内係りは50代の女性であった。背が高く言葉遣いはとても明確で活発に見えた。準備されたワゴン車に乗って個人的な挨拶を交わした。まずは案内員に尋ねた。私たちが持っているカメラや携帯で写真を撮っても良いのかという質問に、答えは「自由に撮っても良い！」ということであった。平壤到着と同時に驚いた事は、このスマートフォンと写真撮影が自由であるという事であった。車は平壤市内に向かって走り、外の風景は畑が広がる農村であった。きれいに整備された田んぼや畑と低い丘にも農作物を植えていることが特徴に思えたが、のちにその理由がわかった。車窓から見える建物の中には見覚えのある建物があった。

平壤駅を過ぎ私たちが乗った車はすぐにホテルに入った。市内までの道路はよく整備され、30分ほどでテドン川沿いに位置する代表団の宿舎である平壤ホテルに到着した。5階建てのホテルの建物は在日同胞事業家の投資で30年前に建てられた建物であると案内員に説明された。チェックインを終え各自の部屋に荷物を下ろし、夕食のためにホテルの2階にある食堂に案内された。広くて清潔なレストランであった。

私たち一行が定められた席に座るやいなや、大学生や高校生60名から70名が一同に入ってきた。しかし、その学生たちは日本語を使っていた。私たち代表団一同は非常に驚いた。平壤に行って日本語を使う学生たちと出会うことすら考えられなかったからである。私たちの協力者として同行した祖国平和統一協会の副会長である李先生が引率者を紹介した。東大阪高等学校校長、朝鮮大学校教授、新聞記者もいた。朝総連同胞学生たちが母国訪問により、伝統芸術を学ぶため約1ヵ月ほど平壤に滞在しながら学習をすると聞かされた。

私は李先生に質問した。「先生、この学生たちは共和国訪問の時、私たちと同じ手続きをするのですか？」その答えは、私たちが経験した事をこの若い学生たちも経験しながら祖国を訪問すると言う事であった。

また、私たちが平壤についた7月27日は「勝戦記念日」であった。1950年6月25日朝4時に始まった韓国動乱が、1953年7月27日22時に休戦協定が成立された日である。平壤の新聞記事は、アメリカは建国以来一度も戦争に負けたことがなかったが、共和国のとの戦争には負け、我々が勝利したという論調であった。

こうして始まった代表団の旅程は、日に日に神様の導きの中にあった事に感謝しながら続けられた。